

5 月例会は「冬の小鳥」

定例総会の要旨

3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による東日本大震災の被害のようすが、伝えられています。現地に赴いたり、物資を運んだり、寄付をしたり直接に支援する人もいれば、直接支援する人たちを支えたり、被災地の商品を積極的に購入するなど間接に支援する人も、身の回りにたくさんいます。

3月17日の例会会場で、義援金箱を設置したところ合計32,605円が集まりました。翌日、このお金を神戸新聞東播支社に寄託しました。

今後も、支援行事への協力や映画関係団体の募金協力などが考えられますが、情報提供などのできる範囲で支援に協力していきたいと考えています。

例会のお知らせ

【例会作品データ】

- タイトル／冬の小鳥
- 監督・脚本／ウニー・ルコント
- 製作／イ・チャンドン
- 出演／キム・セロン、パク・ドヨン、コ・アソン、パク・ミョンシン、ソル・ギョング、ムン・ソングン
- データ／2010年、韓国／フランス、1時間32分、DVD、ドラマ／ヒューマン

【懸命に羽ばたく少女『冬の小鳥』】(推薦)

監督のウニー・ルコントが、韓国から養子としてフランスに渡った自分の体験を基に、九歳の少女の絶望と、新しい一歩を踏み出すまでの心の遍歴を追っ



た韓仏合作映画。

大好きな父親に思いがけず棄てられた九歳の少女ジニ。連れてこられた孤児院で、これは何かの間違いだ、父親は必ず迎えに来ると強く信じ行動する少女のいじらしさ。やがて本当に自分は棄てられたのだと、理解せざるをえない状況におかれる彼女の悲しみ、悔しさ切なさが身に沁みる。ジニを演じるキム・セロンの、とても演技をしているとは思えない、存在感のある自然な姿。彼女の利発で気の強そうな顔つきや可愛い笑顔も、孤独と絶望に痛むような瞳から流れ落ちる一筋の涙も、胸の奥まで深々と沁みとおってくる。

孤児院で暮らす子供や寮母、シスターや院長といった人々の描き方も含め、この種の映画に有り勝ちな涙や情に流されたり、社会の矛盾や正義を殊更に振りかざしたりせず、それぞれの人間を丁寧に理性的に、時に哀しみの眼差しで寡黙に見つめながら、一人の人間の絶望と再生の物語を坦々と描いて行く。実に見事な演出である。

父親に新しい靴と服を買ってもらい、一緒に食堂でご飯を食べながら、父親の飲む酒を一滴指につけ笑いながら舐めてみるジニ。「私、歌ってあげる」と少し古い歌謡曲を楽しそうに歌う。自転車の後ろに乗って、父親の大きな背中にしがみつきながらもう一度歌う。一滴の酒、一滴の涙。夜空に響く少女の唄声。心の中に居座って離れない。

この映画に感銘を受けるのは、脇役が素晴らしいせいでもある。ジニの父親役は『オアシス』のソル・ギョング。厳しく優しい寮母を演じるのは「親切なクムジャさん」のパク・ミョンシン。足の悪い年長の翳りを帯びた娘の役に『ゲエムル』のコ・アソンといった、現代韓国映画の錚々たる演技陣がこの映画をさりげなく支えているのだ。韓国映画の実力をみせつけながら、どこかフランスの香りもする一本でもある。(山本友好)

2011 年度定例総会の要旨

このニュースの発送作業直後4月26日(火)午後7時に、2010年度の加古川シネマクラブ定例総会が開かれます。承認された報告と議決の内容は、総会終了後、5月例会参加者には会場で、欠席の会員には7月例会案内とともに郵送で送付します。ここでは、総会議案の要旨を伝えます。

まず、2010年度の活動報告と決算報告ですが、例会及び50回記念例会事業と会の活動は順調だったのですが、今まで他の団体が主催する上映会に協力したときに分配される協力金が無くなり、実質的に、年平均162人の会員数の会費収入だけでの運営となったため、年間収支は実質約12万円の赤字で、余剰金も無くなり、実質2万円の赤字状態に陥りました。会員を早急に180人以上にしなければ、会の存続ができない状況です。

次に、新年度の役員についてですが、運営委員の1名が減り、監査委員も交替する見込みです。退任する方には、長年、務めていただき深く感謝いたします。

そして、2011年度の活動計画と予算ですが、この会の設立10周年記念事業として、7月9日に神戸を舞台にした『ふたたび swing me again』の上映会と塩屋俊監督の講演会を予定しています。経費のことも考え、第54回例会との合同企画としています。会員の皆さんには、知り合いの方をお誘い合わせのうえご来場願います。予算については、これ以上搾れないほどの極めて緊縮としています。それでも、できれば200人、最低でも180人の会員による会費収入がなければ実現できません。

10周年を迎える年に収支が僅かに赤字の状態になってしまいました。会の設立3・4年までは、赤字状態で、その後、会員数増加、補助金事業の補助金活用、協力事業協力金の活用などで、何とか、黒字にできました。やればできると考えています。

会員の皆さんご協力お願いいたします。

2011年全国映連総会参加報告

全国映連総会&全国映連賞贈呈式は、例年東京で2日間開催されてきましたが、東日本大震災、フクシマ原発の影響が東京にも及んでいる今年は、京都で1日のみの開催に変更となりました。

それでも、約30人の元気な顔が各地から揃いまし

た。総会の議論では、会員を減らしている団体がほとんどで、特効薬もないし、と盛り上がりに欠けましたが、若い人向きの企画、ツイッター開始など、模索している報告もありました。7月の映画大学現地事務局の広島映サから、10月の交流集会現地事務局の神戸映サからのそれぞれ状況が報告されました。

全国映連賞では、開催地が京都になったにもかかわらず、監督賞の川口浩史監督と特別賞の松井久子監督が東京から日帰りで参加してくれ、撮影裏話を含めて熱く語ってくれました。他の受賞者からは、気持ちの籠もったメッセージが届きました。せっかくの機会ということで、両監督を交えて1時間ほどの交流会もあり、楽しく過ごすことが出来ました。

東日本大震災に対しては、全国映画センターと共に、被災地の映画センター(被災地には全国映連加盟組織はありません)に特定した支援金を上映会などで集めていくこととしました。(健)

前回例会の報告

3月17日の例会では、『春との旅』を鑑賞しました。参加会員127人。

図らずも、3月11日の大地震と津波で壊滅的被害のあった気仙沼をはじめ仙台など被災地を舞台とした作品で、いつもの映画を観るときと違う感覚で、ロケ地の風景を観た人も多かった。この時期にこの作品を観たことは忘れられないかもしれない。

さまざまな家族のあり方や現実について、見せつけ考えさせる作品でした。一方、身の抛り所を求めて疎遠の親類縁者を訪ねる旅に出た老漁師と孫娘を仲代達也と徳永えりが演じ、縁者の顔ぶれも豪華で舞台のように楽しめました。

ご意見をお待ちしています

映画の感想や意見など、このニュースへ記事をお寄せください。200~300字程度にまとめていただければ助かります。おすすめ作品をファックス、メールや例会会場のアンケート用紙でお知らせください。

加古川シネマクラブ 〒675-0101

加古川市平岡町新在家752-46 B-313 山本方

TEL 090-9283-0435 FAX 078-935-8528

E-MAIL cinemaclub@nifty.com

<http://homepage3.nifty.com/cinemaclub>

会員数167人(3月19日現在)